

問いをもち、自分たちでゲームの様子を記録しながら追求していく体育学習

— 5年「空いたところを見つけて、ポイントをねらえーハンドテニスー」の実践から —

1 単元のねらい

チームで協力して配球図の記録をとったり、それをもとに得点につながる作戦について考えたりすることを通して、どのように攻撃をすると得点につながるのか考え、相手のいないところや相手がコントロールしにくい場所をねらって返球することができる。

2 授業の構想

(1) 1学期に「走り幅跳び」(全6時間)の学習を行った。第1時では、踏み切り足の確認とミニ記録会を行った。この時間のふりかえりでは「もっと記録を伸ばしたい」「遠くに跳ぶためにはどうしたらいいのか」などという問いや思いが子どもたちから多く挙げられた。そして第2時では、「どこをどのようにすると記録が伸びそうか考えよう」というめあてを提示し、記録を伸ばすポイントについて考え、予想する時間を設定した。子どもたちは、大事なポイントとして助走(2名)、踏み切り(19名)、空中動作(1名)、着地(7名)を挙げていた。

- ・助走を勢いよくすると、そのままの勢いがつき記録が伸びる。
- ・踏み切りを思いっきりけることです。力強くけると遠くに跳べます。
- ・前のめりで、踏み切りを思いっきりふめるといい。
- ・前に重心をかけると、前に進む力がうまれて遠くに跳べる。
- ・空中で足をおなかに引きつけて、ギリギリで着地すればいい。
- ・着地の時、足を前に出したらいい。

運動のポイントについて、いろいろな角度から考える子どもたちである。この走り幅跳びの単元では各局面の学習において、子どもたちの思いを取り上げ、めあてをつくり、確かめながら学習を行った。最終的には、踏み切りの瞬間の身体の向きや空中での身体の動かし方などについての学習を深めた。本単元の学習でも、子どもたちは「自分も得点したい」「どのようにボールを打つと得点できるか」などの問いや思いをもつであろう。子どもたちの問いや思いを起点とし、ゲームを通して得点するためのポイントを考え、学習を深めていくことになるだろう。

(2) 本単元「ハンドテニス」はボール運動のネット型の運動である。ネット型には、ソフトバレーボールやプレルボールなどがあるが、このハンドテニスはボールをつなぐ序盤、中盤の局面がない。常に相手コートにボールを打ち返し得点を取る終盤の局面について子どもたちは学習していくことになる。つまり、終盤局面における戦術的かつ意図的な動きや判断、作戦を考えるのに有効な教材である。また、ワンバウンドのボールを山なりに打ち返すという技術は他のネット型の運動と比べると容易である。このことにより、相手コートの空いているところをねらったり、ボールが行く方向を予測したりすることを学習するのに有効な教材である。

本単元において、体育の時間にテニスをすることは初めての経験になるので、まずはハンドテニスにしっかりと浸らせたいと考えている。本単元ではダブルスのゲームを行うが、ゲームに浸らせる中で、ルールや交互に打つダブルスの方法にも慣れるであろう。そして、ゲームの中で、困ったことや考えてみたいことが子どもたちから出てくると考えられる。多くの子どもたちが最初にもつ問いは「どのように打つと相手コートに返球できるだろうか」ということであろう。この問いについては、ゲームを通して手の形や体の向き、腕の使い方などを学習するとともに、毎時間最初にド

リルゲーム（ラリー回数競争など）を通して確実な返球の仕方の定着を図っていく。そして、本単元全体を通して「自分も点を決めたい」「点を決めて勝ちたい」という思いから、「どうすれば得点できるのか」「どのように攻めると効果的なのか」などという問いをもつと考えられる。最終的には学級で「どのように攻めると得点をあげられるか考えよう」という学習課題を設定していく。

本単元を通して、最終的に子どもたちには次の力を身につけてほしいと考えている。

- ボールを打つ前の相手コート状況を見て、確かめる力。
- 空いているところを見つけ判断し、意図した方向に返球する力。
- チームやダブルスのペアで得点につながる作戦を考える力。

このような力を身につけるために、子どもたちはチームで話し合いをしたり、ゲームを通して声を掛け合ったりしながら追求をしていく。その追求する中で、指導者から「ボールの配球図」を記録していくよう提案していく。チームの中で、どういうところに打っているのか、どのように攻めているのか、どういう攻め方の時に得点につながったのかを考える材料としていきたい。この配球図も、点から球道を表す線へと変化させていく。最初はボールの落下点を点で記録していくことにより、相手のいないところに返球すること、コートの端をねらい広く使うと効果的なことなどを考えるであろう。さらに球道を線で記録することにより、どのように返球していくと得点につながるか、より具体的に考える材料になると考える。このような「ボールの配球図」の記録を提案し、はたらきかけを行うことで、「どうすれば得点できるのか」という問いがどんどん深まり、具体的に得点につながる動きや返球の仕方を追求していくことになる。この配球図は3時間目に提案していく。前時のゲームの配球図を指導者が記録し、それを紹介し、どのような特徴があるのか、どのようになると得点につながりそうか考えることを通して配球図と出会わせたい。この配球図を通して、自分や仲間の姿を観察し、思ったことを言葉や身体をつかって伝える姿が連続するように、そして問いが深まっていくようにはたらきかけをしていく。最終的には、配球図の記録や学習したことを生かして、得点につながる返球の仕方を考え、攻め方を工夫し、チームで作戦が考えられるようにしたい。

3 展開計画（全7時間）

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇追求する子どもの姿
1	1 2	○ハンドテニスのルールを理解し、試しのゲームを通して、本単元の学習課題をつくる。 ・ルールを理解し、試しのゲームを楽しむ。 ・相手コートへ返球するコツを考える。 ・ゲームを通して、学習課題をつくる。	◇ゲームの中で得点につながる返球の仕方を予想する姿
2	3 4 5 6	○得点につながる返球の仕方について考え、まとめる。 ・前時の配球図の記録を見ながら、どのような特徴があるか考える。 ・配球図(点)を記録し話し合いながら、相手がいなかったところやコートの端の方をねらいよさについて気づく。 ・チームで配球図(点)を記録し話し合いながら、相手のいないところをねらったりコートを広く使ったりするよさについて考える。 ・チームで配球図(線)を記録し話し合いながら、得点につながる攻め方について考える。 ・まとめのゲームに向け、チームで配球図(線)を記録し話し合いながら、前後左右に相手を動かして攻める組み立てや返球の方向、仕方について考え、作戦を工夫する。	◇配球図の記録からどういうところにボールが落ちているか、特徴を考える姿 ◇配球図(点)の記録をもとに話し合い、わかったことをゲームの中でやってみようとする姿 ◇配球図(点)の記録や前時の学習をもとに得点につながる返球の仕方について考え、ゲームの中で確かめる姿 ◇配球図(線)の記録や前時の学習をもとに、ゲームを通して得点につながる攻め方について考える姿 ◇前時までの学習や配球図(線)の記録をもとに、ゲームを通してさらに具体的に作戦を工夫し考える姿

3	7	○これまでの学習を生かし、チームで作戦を考え、まとめのゲームをする。 ・ゲームをして、さらに作戦を工夫する。	◇前時のまとめをもとにゲームで確かめ、さらに作戦を工夫する姿
---	---	---	--------------------------------

4 授業の実際

本実践は、問いをもち追求する姿として「自分や仲間の姿を観察し、思ったことを言葉や身体をつかって伝える姿」を目指し取り組んだ。子どもたち一人一人が問いをもち追求を続けるためには、学習のめあてはもとより、そのめあてにつながる前時のふりかえりが重要と考えた。そのふりかえりでは、明確な視点を与えてふりかえられるように実践した。さらに問いをもち続け、深めていくためには、出会わせ方を工夫することが重要と考え、はたらきかけを行った。

(1) ハンドテニスとの出会い

第1時において、子どもたちにテニスをすることを伝えると、テニスクラブに通っている数名の子どもたちは「やった〜。」という反応だったが、多くは「えっ？体育でテニス？」「テニスできるの？」「難しそう」という反応であった。そこで、ルールを簡単にしていることや両方の手を使っていることなどを伝えてゲームを行った。最初に示したルールは次のものである。

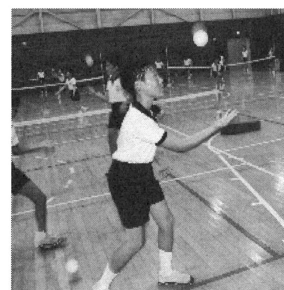
- <ルール> コートの広さは5m×10m
- 判定は審判が行う。
 - 両方の手を使ってもよい。(ワンバウンドで打ち返す)
 - ボールを持って返すのはいけない。
 - サーブをするのはコートの中央付近
 - ボールが相手コート側でツーバウンド以上したら得点になる。
 - 相手が返してきたボールが外に出たり、ネットに引っかかったりしたら得点になる。

このルールのもと、前半はシングルス戦を中心にゲームを行った。単元を通じて、運動に偏りがないように触球回数をほぼ均等にするためにダブルス戦のゲームを行いたかったので、後半は次のルールを追加し、ダブルス戦のゲームを行った。

- 2人で交互にボールを打ち返すダブルスのゲームを行う。
- ・サーブを打った人、サーブを打ち返した人で次に打つ人が決まる。

このようなルールのもと、最初はシングルス戦とのルールの違いから打ち返す順番などで戸惑っていた子どもたちではあったが、慣れてくると意欲的にゲームに取り組むようになった。この時間のふりかえりには「困ったことやこれからどんなことを考えたいか」というテーマを与え、体育ノートに記入させた。次のようなふりかえりを書いていた。

- ・ダブルスで、交互に打つのが難しかった。
- ・ボールに早く慣れたい。
- ・あまりラリーが続かなかったので、ラリーを続けたい。
- ・ラリーを続けるためには、どんな打ち方をしたらいいのか考えたい。
- ・ねらったところに打ち返したいけど、どうやったら打てるか考えたい。
- ・Hくんを見ていると、1歩下がって打っていた。まねがしたい。
- ・相手が打ち返しにくいように打ちたい。
- ・どこをねらって打つといいのか考えたい。
- ・どんなふうに打つといいのか、作戦を考えたい。



これらのふりかえりを見ると、子どもたちの意識はルールやボールに関すること、ボールの打ち返し方に関すること、得点につながる打ち返し方に関することと大きく分類できた。

ルールやボールに関することは、ある程度体育の授業やゲームの回数を重ねていくと慣れていくと考えた。具体的には、毎時間最初の10~15分において「ボールに慣れる運動」として片手や両手交互にボールをコントロールする運動などを継続して行った(図1)。また、ルールについては、ボールへの慣れと合わせて壁打ちをしながら交互に打つことにも取り組んでいった。

また、子どもたちがもつ「ねらったところへのボールの打ち返し方」と「得点につながる打ち返

し方」については、本単元のねらいにも迫る思いであり、授業者として大事にしたい子どもたちの問いであると考えた。

(2) ねらったところへボールを打ち返す

第2時では、ねらったところへボールを打ち返すコツについてのめあてを設定し授業を行った。ボールに慣れる運動をした後、子どもたちに「相手コートへのねらったところにボールを打ち返すコツは何だろうか？」と質問してみたところ、次のような発言が聞かれた。

- ・手のひらにきちんと当てる ・落ちていていいねいに打つ ・下から上に山なりに打つ
- ・コート中央付近に向かって打つ ・力の加減をする

このような漠然とした回答が多かった。そこで、「Hくんを見ていると、1歩下がって打っていた。まねがしたい。」という前時の振り返りを紹介し、Hくんに壁打ちをさせ、どこでボールを打っているかを全員で観察することを提案した。すると、子どもたちからはいろいろな発言があったが、その中で「『山の中腹』で打っている」(図2)というつぶやきがあった。「山の中腹」とは、右のとおり、ワンバウンドして一番高いところではなく、少し下がったところで打つことを表した言葉である。この言葉を意識しながら、チームで「ラリー回数に挑戦しよう」とゲーム形式で取り組ませた。すると、前回のラリー回数が4、5回だったチームが12回に増えていった。このラリー回数に挑戦した後、子どもたちからは次のような言葉が聞かれた。

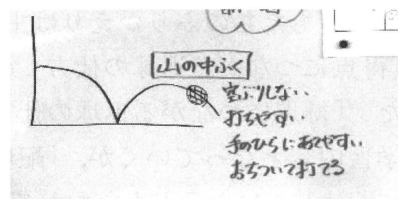


図2：「山の中腹」についての板書

- ・空振りしなくなった ・とても打ちやすかった ・手のひらに当てやすかった
- ・落ちていて打てた ・落ちていて打てるから、ねらったところに打ちやすかった

この学習を通して、子どもたちから出た「山の中腹」という言葉を意識させたことは効果的であった。この子どもから発せられた言葉が、子どもたちの中でも打ち返し方のポイントを表す言葉になったり、授業者からなかなか打ち返せない子どもへの声かけの言葉になったりした。また、この時間以降「ボールに慣れる運動」の中に「ラリーに挑戦」という時間を短時間ではあるが設定し取り組ませた。単元の終わりには、どのチームも20回近くまでラリーが続けられるようになった。このことから、基本的な技能である「ねらったところにボールを打ち返す」ことはある程度どの子にも身につけ、高めることができたとと言える。

(3) 配球図との出会い

本単元全体を通じて、配球図を提案することは大きなはたらきかけの一つであり、子どもたちにとって得点につながる配球の仕方を学ぶ上で重要な追求方法となる。第3時において、配球図を提案する際に「この配球図を使って、ボールがどこに落ちているかを記録していこう」という一方的な声かけも可能ではあったが、より深く配球図を記録する意味や配球図からわかることなどを伝えるためには出会わせ方を工夫する必要があると考えた。そこで、第2時のゲームの配球図の記録(授業者自身が記録:図3)を子どもたちに紹介し、その記録から「どういったことが分かるのか」と問いかけ、出会わせた。子どもたちからは右の記録から次のような意見が出された。

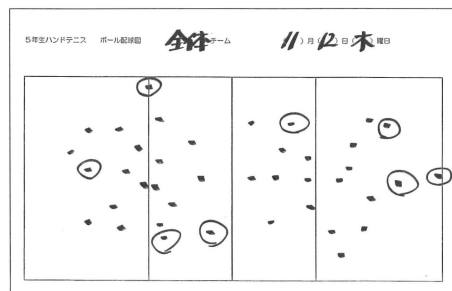


図3：第2時の配球図の記録

- ・コート真ん中に返すことが多い ・コート端は少ない
- ・得点になっているのは、コート真ん中ではなく、コート端が多い
- ・ラインのぎりぎりのところは、取りにくいから得点につながっているかもしれない
- ・ネットに近いところも得点が多い

このような話し合いの後、実際にチームで配球図の記録をとりながらゲームをすることとした。この時間は「配球図からわかったこと」というテーマを与え、ふりかえりを記入させた。

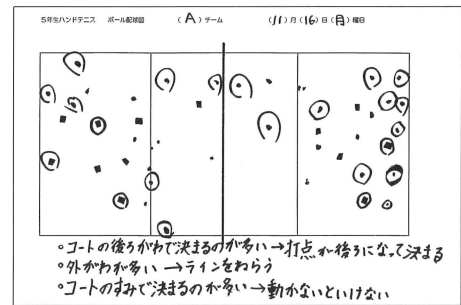
～配球図に記録するよさについての記述～

- ・配球図を使うと実際にぼくたちのボールはどこに行き、どうやって得点しているのかよくわかった。
- ・私たちのチームは、私たち側から見て右下に打つと、よく点になっていることがわかった。
- ・配球図を使うと、どんなところのボールが点になりやすいかなどわかってよかった。

～得点につながる返球の仕方についての記述～

- ・コート隅の隅や角のところが、得点が多かった。
- ・ネットやコートのラインぎりぎりのところが得点が多かったのでねらっていきたい。
- ・ラインぎりぎりで打つと打ちにくいし、後ろに下がりながら打つのが難しいのでねらっていきたい。
- ・前や後ろに相手を動かすといいと思った。

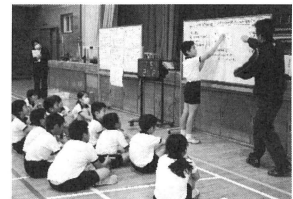
子どもたちのふりかえりは主に「配球図に記録するよさ」「得点につながる返球の仕方」の2つに分類することができた。「得点につながる返球の仕方」については、次時以降の学習内容となっていくが、「配球図に記録するよさ」について記述していた子どもたちが多かったことには驚いた。それは、配球図との出会わせ方を工夫したことにより、配球図の見方や考え方が理解できたことや「自分たちの返球について考えよう」という意欲につながったからだと考える。



子どもたちの配球図の記録

(4) 配球図を使って得点につながる返球について考える

第4時では、第3時のふりかえりから「得点につながる返球の仕方」に関わるものを紹介し、さらに得点につながる返球の仕方について追求したり確かめたりする時間を設定した。まずは、配球図の記録をチーム内でとりながらゲームをし、その後学級全体での話し合いを行った。



- T：どんなところに返球すると、得点につながったかな？
 C：コートの後ろのラインぎりぎりをねらうとよかった。
 C：主にコートの後ろ半分に打ち返すといいと思った。（コート図の後ろ半分に斜線を書きこんだ）
 T：他にはないかな？
 C：次に打つ相手がコートの外側にいたら内側に打って、内側にいたら外側に打つといいと思った。
 T：それはどういうことかな？
 C：相手のいる場所によって、ねらって打ち返す場所を変えるといいということだと思います。
 ～この発言後、うなずく児童が多く見られた。～

これらの発言から、相手のいる場所を見て、相手のいないところをねらって返球すると得点につながると考える子どもたちが多くいることがうかがえる。この話し合い後、再度ゲームを行い、「得点につながる返球について考えをまとめる」というテーマでふりかえりを行った。

- ・人のいる場所によって、打つ場所を変えていくと得点になった。
- ・ネットぎりぎりや相手のいないところをねらったりすると得点につながった。
- ・相手は後ろの方にいることが多かったから、前の方に打つと得点につながった。
- ・相手がいないところに打ち返すことが大切だと思った。相手がいないところに打つと、相手が準備できていないから追いつかないので点につながると思った。
- ・大事なことは相手の場所。後ろだったら前に、前だったら後ろに打てば相手は打ちにくいと思った。

これらのふりかえりから、子どもたちの意識は得点するためには、相手のいないところや相手がコントロールしにくい場所に返球するとよいと考えていることがわかる。また「ボールばかりを見てしまっていて相手がどこにいるのか見るのを忘れてしまいました。ボールを1で、相手を9くらい見たいです」と書いていた子どももいた。技能的に難しかったようだが、この子どもも相手のいる場所を見て、相手のいないところに返球しよ



配球図の記録をする子ども

うとする意識に向かっていることがうかがえる。

第5時はさらに得点につながる返球の仕方について、得点になった返球の前の返球に目が向くように考えた。具体的には、「コートの手前やネットぎりぎりに返球すると得点になることが多いみたいだけど、そこばかり打ち返していても得点になるの?」と問いかけ、「チームで新しい配球図に記録しながら、得点につながる返球について考えよう」というめあてで学習に取り組んだ。新しい配球図とは、ボールの落下地点を点で記録することから、その落下地点を線で結ぶものである。返球全体をどのようにすると得点につながるかを考えさせるはたらきかけとして、子どもたちに提示した。子どもたちは、配球図にこれまで慣れた点を描き、その後線で結びながら記録していった。この時間は次のようなふりかえりが見られた。

- ・コートの手前に打つ前に、コートの手前やネット近くに打つと、いつコートの手前に打つかわからないのでいいと思った。
- ・線で結ぶと相手が苦手なコースがわかって、例えば、手前に落としてから後ろをねらうといいと思った。
- ・得点を入れる前のボールのつながりがよくわかりました。わけは、これから相手を動かすところがわかるからです。
- ・配球図を使うと、どのようにボールが動いたのかがわかり、もっとこのようにすればいいのか考えることができたのでよかったです。

これらのふりかえりから、得点になる前の返球や返球の組み立てにも意識が向かっていることがわかる。配球図を点から線の記録にしたことにより、相手がいないところや返球しにくいところを意識しながら返球の組み立てへと深く思考していることがうかがえる。

(5) 配球図を生かして作戦を考える

第5時までの学習を生かして、第6～7時はチームで作戦を考えることをめあてにして、学習に取り組んだ。主に子どもたちは次のような作戦を考えた。

- 1カ所だけではなく、コートの手前などところに打ち返すこと
- ネットぎりぎりのところと、後ろのラインぎりぎりのところに打ち分けること
- 相手を見て打ち返すこと（前にいたら後ろ、後ろにいたら前）
- コートの手前やネットぎりぎりのところ、コートの手前、相手の場所を見て打ち返すこと

これらの作戦を見ると、これまで学習してきたことが作戦に生かし、相手がいないところに返球しようとしていることがわかる。多くのチームは、これらの作戦がうまくいったとふりかえっていたが、中には相手が返してくるボールによって思い通りにボールがコントロール出来ずにねらいどおりに打ち返せなかったチームもあった。

5 おわりに

本単元は、ハンドテニスと出会わせ、子どもたちの問いを整理するところから始めた。子どもたちのもつ問いについては「ねらったところへのボールの打ち返し方」と「得点につながる打ち返し方」の大きく2点であった。「ねらったところへのボールの打ち返し方」については第2時の学習で取り組み、また継続して単元全体を通して10～15分程度返球のスキルアップとして取り組んだ。「得点につながる打ち返し方」については、第3時から学習で取り組んだ。本単元では配球図を提案することを大きなはたらきかけの一つとして取り組んだ。配球図については、前時の記録からわかることを考える出会わせ方を行った。その出会わせ方により、ふりかえりからもわかるように配球図からどういう返球が得点につながるのか深く思考していることがわかる。その後の配球図の点から線へ変化したことも、得点につながる返球の仕方についてさらに深く考えることができた。このように、単元との出会いも大切ではあるが、はたらきかけの手立てとの出会わせ方も工夫することにより、子どもたちの思考も一層深まると考える。

(文責 小林 敏朗)